

まにわの子



真庭市キャラクター
まにぞう・まにぞうファミリー

令和8年4月3日第2号

真庭市教育委員会学校教育課

年度初め真庭市教育委員会教育長よりパート②

「あそび(余白と工夫の余地)」が土壌を耕し、「対話」が未来を創る

3. 「子どもの権利」を真庭の思想にする

こうした確信を、単なる好事例の積み重ねで終わらせるのではなく、真庭の“思想”として定着させていく必要があります。その挑戦が、「子どもの権利条例」の策定です。

子どもが「時間の主人公」として生きる権利、安心の中で試行錯誤し、遊び、やりたいことに挑戦できる権利。

これは、子どもを「将来のための資源」として扱うのではなく、「今を生きる一人の市民」として尊重することそのものです。子どもの声が真剣に受け止められ、その権利が社会の中で実質的に保障されているまちは、子どもだけでなく、障害のある方や高齢者、外国にルーツを持つ人など、多様な背景をもつすべての人にとっても、「ここに居ていい」と思える寛容な共生社会へとつながります。私たちは、条例策定のプロセスそのものを、大きな「あそび」であり、多世代がともに学ぶ機会として設計します。

多くの市民が関わり、語り、迷い、時に立ち止まりながらつくるその道のりこそが、真庭の豊かさそのものです。

4. 「おもしろさ」が支えるヒトの循環



人口減少という不可避の課題に対し、私たちは悲観ではなく、「おもしろさ」で向き合います。幼少期に「自分の存在を丸ごと受け止めてもらえた」、やりたいことを「面白がって応援してもらえた」経験は、その人にとって一生ものの力になります。子どもたちがどこで暮らすようになって、真庭のあたたかな記憶は“還りたくなる心の安全基地”として残り続けるでしょう。また、失敗を許容し、誰もが思いつきを持ち寄り、対話を楽しむ地域の姿は、新しい生き方を求める外からの人々を惹きつける強力な魅力となります。

人口を増やすために権利を保障するのではなく、権利を大切に、人生を楽しむ大人たちがいるからこそ、人が再び循環し、選ばれるまちになる。この循環こそが、これからの真庭の力になります。

私たちはこの「おもしろさ」を軸に、今後3年間の戦略を大胆に展開していきます。

5. おすびに:共に「納得」を紡ぎ出す

正解のない時代を、不安としてではなく、「あそび(余白と工夫の余地)」として捉える。

悩みは悩みのままに共有し、ガヤガヤと話し合いながら互いに「納得」できる答えを紡いでいく。そんな対話を土台にした地域の文化を、市民の皆さんと一緒に育てていきます。

大人が輝き、大人同士がつながりあい、その背中を見て育つ子どもたちが未来に希望を抱ける。そんな真庭を、市民の「持ち寄り」でともに創り上げていきましょう。

